

要旨

【目的】

本研究は、成人への移行期支援体制の充実及び看護実践活動への一助とするため肝移植を経験した青年期の患者が成熟していく構造について、他者や自己との相互作用の中で成熟していくプロセスを記述しながら、理論化することを目的とした。

【方法】

- 1) 研究デザイン：シンボリック相互作用論及び Knowles の成熟理論を理論前提とし、グラウンデッド・セオリー・アプローチを方法論とした質的記述的研究である。
- 2) 研究対象者及び対象施設：小児期（0～20 歳）に生体肝移植を経験した 17 歳～29 歳までの患者であり、現在病状が安定し、医師が本研究の協力に支障がないと判断したものである。対象施設は、関東圏にある一大学病院
- 3) データ収集：半構成的面接であり、インタビュー内容は、肝移植の経験についてどのように考えているか、移植の経験や療養生活が自立する過程にどのように影響したかなどであった。面接は 1 対 1 で行い、面接時間は 1 回 60 分程度、1 人 2～3 回、個室で行った。データ収集期間は 2012 年 4 月～2013 年 12 月である。
- 4) 分析：Strauss と Corbin により開発されたグラウンデッド・セオリー・アプローチの方法に準じて分析した。

【結果】

研究対象者は、14 名であり、平均年齢 21.67 歳、女性 10 名、男性 4 名であった。移植を経験してからの平均年数 12.6 年であった。インタビュー回数は延べ 29 回であり、インタビュー1 回の平均時間は 61.95 分であった。分析の結果、青年期の患者が成熟していく構造は、【移植の経験や病気を意識せずに対等に生きる自負をもつ】ことを基盤に、【社会人として生きるために主体的に自己や他者と向き合う】を中核カテゴリーとして、【解決しきれない不都合と対峙し寛容】し、【療養行動を意味づけ自律的に獲得】し、【社会に生きる意義を主体的に見出す】というプロセスを経ることが示された。

【結論】

肝移植を経験した青年期の患者は、社会人として生きることと向き合う時期に、不都合と対峙し療養行動を自律的に獲得しながら、自己や他者との相互作用の中で、社会人として生きる自分のありようを見出しながら、主体的に成熟していた。病気や移植の経験をした自分が受け入れられるのかという深い葛藤は、成熟するプロセスを難しくさせていると考えられる一方で、自己や他者との相互作用を通して成熟へと向かわせる力となるとも考察された。肝移植を経験した青年期の患者が成熟するプロセスを支える看護として、「普通に生活」「社会人として向き合うプロセス」、「不都合を超える」「療養行動を自律的に獲得」「社会人として生きる意義を見出す」を支援する必要性が考えられ青年期の患者の看護を検討する上での具体的な示唆を得た。今後も、さらなる理論の検証を行い、移行期支援のプログラムを構築していくことによって、看護の臨床に貢献したいと考える。